

有刺鉄線に囲まれた

収容所の思い出

神奈川県 楡井 眞二

昭和十九（一九四四）年六月徴兵一年繰り上げ布告令で徴兵検査を受ける。昭和二十年一月現役召集。新発田十六連隊入営、一月二十六日朝鮮会寧七五連隊転属。六月一期の検閲終了後、関東軍秦二一五三部隊編入、琿春鐘城の山中で陣地構築半ばにして敗戦。八月十七日トモンにて武装解除を受け、間島の旧陸軍兵舎の仮収容所に集結す。行軍の途中南に向かって逃避行を続ける数組の開拓団婦女子の集団とすれちがう。悲惨、残酷、この世の生き地獄を見る。八月下旬日本ダモイの命令で間島出発、徒歩で「ソ満国境」通過し、「クラスキー」の丘で一週間位幕舎で過ごす。列車に詰め込まれ幾日くらい走ったろうか、終点

でトラックに乗り換え奥地へと突っ走る。周囲の風景は雪野原と変わり、だまされてシベリアの流刑地に連れこまれハバロフスク地区三〇一収容所に入った。十月下旬と記憶している。宿舎は囚人たちの獄舎で雪が吹き込むオンボロの建屋だった。

入所当初の作業は道路工事はじめ、水苔ムシリ取りの作業。冬の寒さの中、夏の服装で寒さと空腹で生きた心地なし。休日に凶器所持検査の名目で雪野原に引っ張り出されて私物を広げロシア人の思うがままに引っかき廻され時計、万年筆等々強制的に取られ、文句も言えず精神的屈辱と無念さは忘れられない。

奇異に感じた出来事

一、敗戦のショックと捕虜という精神的痛手の最中に昭和二十一年元旦の朝、大隊長命令で本広場に全員整列宮城遙拝をさせられた。捕虜になっても過去の亡霊にしがみついている。

二、零下三〇度以下に下がる朝の人員点呼で、千人足らずの計算ができないソ連兵の頭腦の程度に驚いた。毎朝一時間近くかかり、酷寒の中、地獄の人員点呼であった。

身上調査と捕虜郵便

大隊本部に一人ずつ呼ばれソ連政治局員の身上調査を受ける。これが抑留者の原簿なのか？ 終わって家族宛てに手紙を書いて出す。日本に届くわけがないと思ったが二十一年の秋に留守家族に配達されていたのには驚いた。

入所当時の食糧と生活

作業から帰り一食三五〇グラムの黒パン一切れと飯盒の蓋一杯のスープでは腹のどこに入ったか分からない。日常の会話といえは早く日本に帰りたい。白いご飯、ボタモチ、漬物が食べたいの繰り返しだった。部屋には電気ランプ等はなく、作業の帰りに持ち帰った白樺の皮を燃やして明かりとした。部屋の中には油煙が立ちこめ、瘦せおとろえた顔が真っ黒に煤け目玉だけギョロギョロさ

せた姿はお互いみじめだった。昭和二十一年十月から民主文化活動が始まった。その後ロシア側の思惑と後押しのため活動が尖锐化して逸脱の嫌いはあったがその頃から抑留ボケが少しずつ立ち直っていった。

二十二年に入って日本人を抑留した最大の目的「バム鉄道」の建設が開始された。岩山を爆破し、崩した岩石を湿地に埋め立てる路盤の構築は昼夜兼行の危険な重労働だった。二十二年五月ダモイ開始、第一次、二次、第三次と幾人かの友が残留者の羨望の中を帰国していった。その年も雪と氷の冬になり、帰国の望みは断たれた。

年が明けて昭和二十三年五月大隊本部に呼ばれ、小生に帰国命令が告げられた。天にも昇る心地だった。

昭和二十三年五月二十五日ナホトカに集結し、同年五月三十日貨物船「永徳丸」に乗船六月一日舞鶴に上陸、吾が生涯忘れることのできない記念日だった。六月三日無事生家に入る。

出征、軍隊、抑留という波乱万丈の三年六カ月はここに終わる。

シベリア抑留の思い出

和歌山県 久保田 耕 作

ソ連のダンプカーから降ろす土石でどんどん埋もれていく。零下三〇度の夜間作業、万事休す。

自分の体はだんだん冷たくなってゆく。その時パッと目が覚め、あゝここは日本や我が家や、復員して五十年になるというのにこのような夢を見る。シベリア抑留のことが身にしてみているのだろうか。

私昭和二十(一九四五)年四月、関東軍予備士官学校(石頭)に希望に燃えて入校したが、その年の八月に敗戦(昭和二十年八月)。十一月に三〇二收容所に抑留。二十一年の春三〇一のカリエル小隊に転属、二十二、二十三年と井戸掘り、路

面建設、駅付近の水道管設置のために穴掘り。一貫して厳しい重労働に従事した。二十四年の春、残り少なくなった隊員と共に、ハバロフスクに移動、各方面から残員と合同、大きなレンガ作りの家を建築する。

二十四年十一月中旬、やっと最終に近い船で舞鶴港に上陸、懐かしの日本の地を踏んだ時の喜び、感激は忘れられません。

復員後、公務員もし、その後結婚し四人の子供と孫に囲まれ、色々事業もやったが力不足等もありましたが、何とかまあまあ生活です。次男は家業の醤油屋をやり、私共も同居しております。私は今は小さなホテルの下足番をして働いております。車が好きで各地を運転して飛び廻っております。